

胡適の『科学与人生観』序

山口 榮

一

「科学と人生観論争（科学と玄学の争い）」は、一九二三年二月十四日、哲学者の張君勳が精華大学で「人生観」と題して講演し、「科学は客観的、論理的、分析的、因果律的、相同性的であるが、人生観は主観的、直観的、総合的、自由意志的、単一性的であり、科学が如何に發達しようとも、人生観に関わる問題は科学を以てしては解決できず、その解決のために頼りとなし得るのは人間自身のみである。」との趣意を縷々述べたのに対し、地質学者の丁文江^②が、同年四月『努力』週報^③に「玄学與科学——評張君勳の『人生観』」を發表し、「凡そ心理的内容、真の概念的推論は一つとして科学の対象でないものはない。」と述べ長文を以て切々と反論したことから起きた。この論争に加わっ

たのは、張君勳側では張東蓀、林宰平、范壽康、菊農、梁啓超等であり、丁文江側では胡適、王星拱、任叔永、朱経農、唐鉞、陸志韋、吳稚暉等であつた。^④

この論争は一九二三年十一月から十二月、論争に加わつた人々の文章が、論集『科学與人生観』として纏められ、陳独秀と胡適がその序文を書いた頃には終息したものと見えるが、陳独秀と胡適が亜東図書館の館主の汪孟鄒の求めに応じそれぞれ序文を書いたのを機に新らたな論争、即ち唯物論者陳独秀の自由主義者胡適等に対する論争が始まり、三十年代まで続いたという指摘もある。^⑤

二

この論争の背景をみるに、胡適は『科学与人生観』序^⑥において次のように述べている。

ここ三十年來、国内で無上の尊嚴をもっている名詞がある。賢愚、守旧維新を問わず、皆敢えて明らさまに軽んじ、侮ることのない名詞、それは「科学」である。そのように国内あげて崇信される価値の有無は別として、少なくとも変法維新の後、新人物と自任している人には、明らかに「科学」を誦する者は居なかつたと言えよう。しかし、民国八・九年（一九一九・一九二〇）に梁任公先生が「欧游心影録」^①を發表するに至り、「科学」は中国に於て初めて明文を以て公式に「破産」の宣告を受けたのである。

梁先生は云う、近代人は科学を發達させて工業革命を行ない、これに伴い外面的生活は急激に変化し、内面的生活も動揺したことは周知の通りである。科学家の新しい心理学によると、人間の心霊は物質的運動現象の一つに過ぎない、……唯物派の哲學家は科学の庇護を頼みにし、その下に「純物質的・純機械的的人生觀」を打ち立てて内面的生活、外面的生活の総てを物質運動の「必然的法則」に帰属させたのである。……即ち、彼等は心理と精神を物と見做し、実験心理学により、人間の精神は物質に過ぎず、「必然的法則」の支配を受けると強弁している。ここに人間の自由意志は否定されざるを得ない。自由意志が無いのであれば、どうして善悪の責任があるうか。……現今の思想界に於る最大の危機はこの一点にある。宗教と旧哲学は科学に打ち破られて旗幟は乱れ、「科学先生」が替りに振り立

ち、その実験的方法を以て宇宙の大原理を明らかにしようとしてゐる。その大原理はさておき、小原理をみるにそれは日新月異であり、今日は真理であり、明日は誤謬となる。新しい權威は樹立されず、古い權威も恢復しない。それ故全社会の人心は懷疑・沈悶・畏懼に陥り、羅針盤を失なつた船が洋上で風霧に遇つたときのように、進路が分らない。このようであるから、樂利主義や強權主義が巾をかすのであり、死後には最早や天国は無いとするのであるから、唯數十年の生涯を思う存分愉快に過ごせばよいのであり、善悪についても責任は無いのであるから、手段を尽くして自らの個人的欲望を追求して何んの不都合があろうか。ところが享受できる物質は欲望の高騰に比例して増加することはなく、両者の均衡を保つ方途はない。そこで各自は力を尽くして自由競争を行なうことになる。有り体にいえばそれは弱肉強食である。近年の軍閥や財閥はそのような状況のうちに出てきたのであり、今次の大戦はその応報である。

要するに、このような人生觀によつて、あの何千何万の人が次々にこの世に現れて數十年の生涯を過ごすとすると、その目的は何であらうか、その唯一無二の目的は「搶麵包喫」（飽食）であらう。そうでないとすると唯宇宙の物質運動の大車輪が動力を失ない、人自らが燃料を供給しなければならなくなると取越し苦勞をすることかも知れな

い。そうであるならば、人生にどんな意味があるのか、人間にどんな価値があるのか。科学全盛時代にあたり、主要な思潮は科学に傾き、科学万能を謳歌する者は、科学が成功をおさめて黄金世界が近々現出するものと期待し、今や功業は成つて、ここ百年の物質的進歩は過去三千年の進歩の数倍である。しかし、我々人間は幸福になれなかつただけでなく、反対に多くの災難を招いている。これは恰も沙漠で道に迷つた旅人が遠くに大きな黒い影を見て喜び、それに向かい力を振り絞つて前進し、何程も行かないうちにその黒い影が消え、悲痛な失望を味うようなものである。その黒い影は即ち「科学先生」である。歐洲人は「科学万能」の大夢を見たが、今は「科学破産」を公言している。と。〔梁任公近著〕第一輯上巻頁一九—二三〕

梁先生はこの文章で科学家の人生觀の流毒について情感に強く訴えるような指摘をしている。彼はあの「純物質的・純機械的的人生觀」が歐洲の全社会を「懷疑・沈悶・畏懼の中に陥れ」、「弱肉強食」の社会に変えた。「今次の大戦はその応報である。」と訴えている。彼は科学家の人生觀が「搶麵包喫」（飽食）社会を現出し、人生を少しの意味もないものにし、人間を少しの価値もないものにし、人間に幸福を齎すのではなく、「人間に多くの災難を齎らし、人間を限りなく悲痛な失望に陥れた」と訴えている。梁先生の説いたのは歐洲に高まつた「科学破産」の声につ

いてであつたが、科学家の人生觀の罪状を論うことにもなつた。梁先生は科学的的人生觀に対する玄学家の侮蔑的發言を取り上げたばかりか、さらに「科学破産」の悪言を付加したのである。

梁先生は後にこの文に自ら二行の註記を加えて、読者はどうか誤解しないで頂きたい。このように科学を貶すといはいえ、私自身は決して「科学破産」を承認する者ではなく、「科学万能」を承認しないに過ぎないのであると述べている。しかし、風説は野火と同じく放つのは容易であるが、収めるのは困難である。「欧游心影録」が発表されてからは、科学の中国に於る尊嚴は以前とは比べものにならない。国外に出たことのない老先生方は得意になつて「歐洲の科学は破産した。梁任公がそう言つている。」と吹聴している。梁先生の話と近頃の同善社・悟善社の風行とに直接の關係があるのか否か言うことはできない。しかし、梁先生の言葉が国内の反科学勢力の威風を少なからず助長したことは確かである。梁先生の声望、梁先生のある「筆鋒に常に情感を帯びた」健筆により、読者は容易に彼の言説の影響を受けたのである。まして、國中の張君勳先生のようなたたが柏格森、倭鏗、欧立克……等の旗印を掲げて次々に現われて、梁先生の起こした波瀾を大きくするに於てをやである。歐洲では科学は既に深く根を降ろして、玄学鬼が攻撃してきても心配はない。反動的哲學家が

科学の滋味に飽き、科学に対する不満話をして、富貴な人が魚肉に飽きて漬物・豆腐の風味を好むのと同じく、全く危険はない、光燄万丈の科学は少しばかりの玄学鬼の活動によって揺ぐものではない。しかし、中国ではこれと異なり、現在まだ科学の恩恵を享受するに至っていないのであるから、科学の齋らす災難を云々するのは論外である。目を開いてよく見ると到る処に乩壇・道院があり、神仙・方術・鬼神の画像がある。それに加え交通・実業は未発達である。そのような我々に果たして科学を排斥する資格があるであろうか、人生観について云えば、我々には「做官发财」・「靠天吃饭」・「求神问卜」・「安士全書」・「太上感應篇」の人生観があるだけであり、中国人の人生観はまだ科学と対面の挨拶をしていない。まさに科学の提唱が不十分なこと、科学教育が未発達なこと、科学勢力が国内に瀰漫している烏烟瘴気を除去できないことなどにつき苦慮している時に、図らずも著名な学者が「欧洲の科学破産」を公言し、欧洲文化破壊の罪名を科学に着せ、科学を貶し、科学家の人生観による罪状を具に挙げ、科学が人生観に影響を与えることを無用と考えている。科学を信奉する者は、そのような状況を憂慮しないでおれるであろうか、声をあげて科学を弁護しないでおれるであろうかと。

三

科学と人生観論争のとき胡適は杭州烟霞洞で病氣療養中であつたが、下山して上海に帰り汪孟鄒の依頼に応じ『科学与人生観』序を書くにあたり編集中の論集『科学与人生観』収録論文二十九篇、字数凡そ二十五万字に目を通し、この論争に重大な欠陥のあることに気付き、もしもこの論争が梁啓超の「科学万能之夢」^②を討論の基礎としたならば問題が鮮明になり、紛糾を免れることができたであろうにと述懐している。その欠陥とは胡適の見解では呉稚暉の「一個新信仰的宇宙観及人生観」を除き、皆科学的人生観についての具体的な論究が欠落していることであつた。そこで胡適は呉稚暉の人生観・宇宙観を基調とする新人生観すなわち科学的人生観を提示している。その新人生観の輪廓は次の各項から判明するであろう。

(1) 天文学と物理学の知識に基づき、人々に宇宙が無窮に広いことを知らせる。

(2) 地質学および古生物学の知識に基づき、人々に時間が無窮に長いことを知らせる。

(3) あらゆる科学に基き、人々に宇宙および万物の運行変遷は皆自然であり、自ら此くあるのであつて、如何なる超自然の主宰者あるいは造物主によるもので

はないことを知らせる。

(4) 生物的・科学的知識に基づき、人々に生物界に於る生存競争の浪費と惨酷とを知らせ、人々に「好生の徳」を有する主宰者の存在を認める仮説が成立しないことを明らかにする。

(5) 生物学、生理学、心理学の知識に基づき人々に人は動物の一種に過ぎず、人と動物は程度上の差異を有するだけで、種として別のものではないことを知らせる。

(6) 生物学および人類学、人種学、社会学の知識に基づき、人々に生物および人類の社会の進化の歴史と進化の原因を知らせる。

(7) 生物学、心理学に基づき、人々にあらゆる心理現象にはすべて原因があることを知らせる。

(8) 生物学および社会学の知識に基づき、人々に道徳、礼教が変遷するものであり、変遷の原因はすべて科学的方法を用いて究明できることを知らせる。

(9) 新しい物理・化学の知識に基づき、人々に物質は死的・静的ではなく活的・動的であることを知らせる。

(10) 生物学および社会学の知識に基づき、人々に個人―「小我」―は死滅するが、人類―「大我」―は不死であり、不朽であることを知らせる。「全種・万世のため生きること」こそが真の信心であり、最高の宗

教である。個人のために死後の「天国」「浄土」を説く宗教は自私自利の宗教である。

右の新人生観を信奉するとはいへ、胡適はもとより決定論、宿命論に与するのではなく、『科学与人生観』序の結びに、因果律の支配する大宇宙・大自然の中にあつて、人間は実に渺小な微生物であり、酷薄な天行・生存競争の惨劇にさらされ、その自由は限られているが、その両手と大脳によつて多くの器具をつくり、多くの方法を考察し、文化を創造するものであり、自然主義的宇宙観・人生観は決して無味乾燥なものではなく、その中には詩意があり道徳的責任心があり、創造的知恵を充分に發揮する機会がある旨を説いている。

四

科学主義⁷⁾の立場から「科学」と「民主」⁸⁾を鼓吹し新文化運動を展開し、さらに進んでマルクス主義を受容し中国共產党の創立者の一人となつた陳独秀は、同じく「科学」と「民主」を鼓吹し、また吳稚暉の「漆黑一团的宇宙観」「純物質的・純機械的人生観」に賛同し科学的な新人生観を提唱した胡適に対し、「百尺竿頭にあつて今一步進む」ことを肯んじ彼の陳営に加わるよう希望したが、胡適は「思想、知識なども社会變動の客観的原因であり、唯物(經濟)史

観は確かに大部分の問題を解釈できるものであるが、すべてではないと考えるので、百尺竿頭をさらに一步進むことはできない。」と言つて辞退している。^③

思うに、科学技術の急速な発達に対し、人文科学、社会科学の立遅れが指摘されて久しくなるが、中国一九二〇年代の「科学与人生観」論争は右の問題に関わる検討を進める上にまだ今日的意義を有している^④であらう。

註

① 張君勳（一八八七—一九六九）、名は嘉森、西欧には *Carson Chang* の名で知られている。一八六九年日本留学、早稲田大学で学ぶ。のちドイツ留学。一九一七年北京大学教授就任。

一九二〇年ドイツのイエーナ大学でオイケン教授に従い哲学を研究、一九二九年イエーナ大学で中国哲学を講述。

② 「人生観」、「科学与人生観」上海亜東図書館民国一二、一二刊
東京龍溪書舎一九七五、一、復刻、原載「清華週刊」第二期。

③ 丁文江（一八八七—一九三六）字は在君。十五歳のとき日本留学、のち一九〇四年イギリス留学、グラスゴー大学で動物学と地質学を学ぶ。一九一三年北京政府工商部鉱物局地質科長。一九三二年北京大学教授。

④ 「努力」週報 胡適主編、一九三二年五月七日北京で創刊、一九三三年一〇月停刊。

⑤ 「努力」週報第四十八期（一九三三、四、一五）第四十九期（四、二二）所掲。尚、第四十八期以降は胡適が病氣療養のため停刊を考えていたところ、丁文江の建議により継続発刊されたという。

⑥ 周策縦著周子平等訳「五四運動—現代中国的思想革命—」江蘇人民出版社一九九六、一二、刊、頁四五七。

⑦ 張憲文、方慶秋、黃美真主編「中華民國史大辭典」江蘇古籍出版社二〇〇一、八刊、頁一三八四。

⑧ 周策縦著周子平等訳「五四運動」頁四六〇。

⑨ 「科学与人生観」上海亜東図書館刊、陳独秀「科学与人生観」序」に続いて掲載されている。又「胡適文存」第二集卷二、上海亜東図書館、民国十三年十一月刊に輯録されている。

⑩ 梁啓超（一八七三—一九二九）、号は任公、飲冰室主人ともいう。一八九八年戊戌百日維新の後、日本に亡命、一九〇二年「新民叢報」創刊、啓蒙活動を行う。

一九一八年第一次世界大戦終結、パリ講和会議にあたり、世界平和と中国の安寧を願い、外交的責任を果すために、諸般の事情により私人の資格を以って十二月二十九日、日本郵船横浜丸に乗って渡欧、一行は梁啓超（仁公）、蔣方震（百里）、劉崇傑（子楷）丁文江（在君）張嘉森（君勳）徐新六（振飛）、楊維新（鼎甫）の七名であった。なお、丁在君と徐振飛は満員のため乗船券がとれず、太平洋回りで渡欧。一九一九年二月十八日パリ到着、中国の輿論を鼓吹する外交的活

動を展開するとともに戦場となつて荒廢した各地の状況を視察、六月からはイギリス、ベルギー、オランダ、デンマーク、イタリア、ドイツなど各国を視察する。

この間多くの政治家、哲學家、文學家に会つたが、最も感銘が深かつたのは、十年來夢にまでみた新哲學の大家ベルグソンと会えたことであり、梁任公、蔣百里、徐振飛の三人は急拠予め、ベルグソンの著述を徹底的に研究し、その要点を纏め会谈に臨んだという。徐振飛は同時通訳の天才で、長時間にわたり立派に大役をつとめてベルグソンに褒められ、また張東蓀がベルグソンの「創化論」の翻訳を問もなく完成すると話したところ、とても喜び、序文を書くことを約束してくれたという。

一行は一九二〇年一月二十二日マルセイユでフランス郵船に乗船して帰途につき、三月五日上海に帰着する。(楊家駱主編「梁任公年譜長編」台北世界書局、民国六一、八、再版)

⑪ 陳松編「五四前後東西文化問題論戰文選」中国社会科学出版社一九八五、二刊や耿雲志主編「胡適論集」中冊、中国科学出版社一九九八、九刊に輯録されている。

⑫ 「欧游心影録」のなかの文である。

⑬ 吳稚暉(一八六五—一九五三)名は敬恒、江蘇武進の人。一九〇一年日本留学、東京高等師範学校で学ぶ。のち渡欧、一九〇五年フランスで中国同盟会に加入。張人傑、李石曾等と

『新世紀』を發刊、無政府主義を鼓吹、一九二四年中国国民党中央監察委員に選任される。

⑭ 胡適「科学与人生觀」序。

⑮ 本項(1)~(10)の「新人生觀」についての説明文中の「人々に……ことを知らせる」の表現は、Hu Shih, 'My Credo and Its Evolution' ('我的信仰', 'Irving Philosophies', Simon and Schuster Press co. Ltd New York 1931)に於ては、'We should recognize' 「我々は……ことを認識する」という言い回しになっている。胡適著 歐陽哲生 劉紅中編英漢对照(英文中文对照)『中国的文芸復興』北京外語教育出版社二〇〇一、二、刊、頁二五二参照。

⑯ これが即ち胡適の社会不朽説である。

⑰ 中国科学社が一九一五年一月上海で自然科学關係の刊行物『科学』を創刊「科学救国」の信念のもと、科学概論、科学史、科学伝記、科学問答や数学、物理学、化学、電気、農学、医学、生物学の専門記事を掲載し、科学主義を鼓吹した。編集長は楊銓であった。

⑱ 科学主義を大いに広めたのは陳独秀が一九一五年九月十五日上海で創刊した『青年雜誌』(翌一九一六年九月一日から『新青年』と改称)であり、「科学」(Science)ともに「民主」(Democracy)を鼓吹することが極めて大切であると考へた。

⑲ 陳独秀「科学与人生觀序」、「胡適文存」第二集卷二頁三一。

⑳ 胡適「答陳独秀先生」、『胡適文存』第二集二卷頁四四。

㉑ 當時の論争に於る精神と物質、主体と客体、自由意志と理性、科学主義と人文主義等の問題は今日も哲学思想の問題点であるが、林毓生「中国伝統的創造性転化」生活・讀書・新知三聯書店一九八八—一二、刊をみると、「民初科学主義的興起与含意—对科学与玄学之争的研究—」の一文中に「中国の科学主義は現在人文科学と社会科学の發展過程に於る阻力となつてゐる」。「科学的方法（帰納法的方式）万能の信念および主観と客観の逾越と溝通を否定する強い觀念が重大な影響を及ぼしているが、社会的危機：政治的危機に加え文化が困迷して方向性を失ない、文化的危機の生じている時は最もイデオロギーを必要とする時である。」旨の指摘がある。

〈付記〉人名、事項に係る注記のいくつかは、『中華民国史大辞典』江蘇人民出版社および『民國人物小傳』台北傳記文學雜誌社刊に拠っている。

（やまぐち さかえ・中国近代思想史）